



文献レビューの書き方に関するレビュー ; 過去の要約, 統合, 批判から未来を紡ぎ出す考え方と技術の整理

服部, 泰宏

(Citation)

国民経済雑誌, 222(5):65-89

(Issue Date)

2020-11-10

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(JaLCD0I)

<https://doi.org/10.24546/E0042374>

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/E0042374>



国民経済雑誌

文献レビューの書き方に関するレビュー：
過去の要約，統合，批判から未来を紡ぎ出す
考え方と技術の整理

服 部 泰 宏

国民経済雑誌 第222巻 第5号 抜刷

2020年11月

神戸大学経済経営学会

文献レビューの書き方に関するレビュー： 過去の要約，統合，批判から未来を紡ぎ出す 考え方と技術の整理

服 部 泰 宏^a

本論文では，過去20年ほどの間に蓄積されてきた文献レビューの書き方に関する議論を分野横断的にレビューし，主要なポイントを抽出，それぞれのポイントに関して先行研究が提示している「良いレビュー論文の要件」を筆者なりに整理する。36本の文献レビューから抽出された主要なポイントは，（1）文献レビューの機能，（2）渉猟する文献の探し方や決め方や範囲，（3）論文の各パートにおける記載事項（イントロ，方法，結論），（4）先行研究の要約の仕方，（5）統合の仕方（6）批判の仕方，そして（7）文章の書き方といった点である。総じてレビュー論文の貢献とは，既存研究の広がりや適切に要約し，かつ，要約した世界に対して独自の視点から批判を加えたり，統合したりすることで，読者には見ることのできなかったその領域の新しい未来像を提示することにある，といえる。

キーワード 文献レビュー，統合的文献レビュー，要約，統合，批判

1 イントロダクション

それ自体1つの完結した研究として，また経験的な研究の前段階にあって自身の研究の価値や貢献点を明確にするために，私たちは文献レビューを行う。文献レビューとは，一般的に，「既存研究の体系（あるいは諸体系）の検討を通じて，理論の構成要素を特定し，それに挑戦し発展させることで，その体系を分析し統合する，1つの研究」（Post, et al., 2020, p. 352）を指す。レビュー論文の著者は，過去に発表された複数の研究を要約し，問題を定義し，明確にし，複数の研究の間の関係性や矛盾点，ギャップなどを特定し，その領域で起こっている問題を解決するための次のステップを提案する（Sayer, 2018）。これらは，どのようなディシプリンにおいても，研究における最も基本的にして最も重要なステップだといえる。

a 神戸大学大学院経営学研究科，y-hattori@people.kobe-u.ac.jp

しばしば指摘されるように、良いレビュー論文の書き方に関して、経験的な研究論文のような標準化されたルールが存在するわけではない (Sayer, 2018)。先行研究をどのように読み、どう要約し、自らの議論を展開するかということに関しては、研究者のセンス (感覚) やアート (直感) に依存する部分が多い。

ところが過去20年ほどの間に、文献レビューの書き方に関する学術的な議論が、かなりの程度蓄積されてきた。社会科学領域においても、「良いレビュー論文を書くということ (writing a good review paper)」に関わる議論の蓄積が進み、かつ、どの文献のどの主張が標準的な考え方であるか、ということに関するコンセンサスも形成されつつある (e.g. Salipante, Notz and Bigelow, 1982; Bem, 1995; DiMaggio, 1995; Baumeister and Leary, 1997; Webster and Watson, 2002; Yorks, 2008; Torraco, 2016; Sayer, 2018; Post, Sarala, Gatrell, and Prescott, 2020)。研究者のジャーナル志向 (査読付きジャーナルへの掲載を目指す傾向) が強まったことを受けて、レビュー論文の書き方に関しても標準化が進んだ、ということなのだろう。

こうした議論の特徴を端的にいうならば、「一流誌に掲載されるレビュー論文とはどのような要件を満たしたものであるか」ということになる。それは、なんらかの理論的な観点に立って、「良いレビュー論文」の条件を演繹的に抽出するというよりは、むしろ、過去の優れた研究者たちが残してきたレビュー論文の共通性に注目し、研究コミュニティの中で暗黙のうちに共有されてきた理解 (conventional wisdom) を、帰納的に抽出しようという議論である。

本論文の目的は、過去20年ほどの間に蓄積されてきたこうした議論を分野横断的にレビューし、ともすれば散発的に展開されてきた議論の中から主要なポイントを整理しつつ、それぞれに関して先行研究が提示している「良いレビュー論文の要件」を筆者なりに整理することにある。

2 議論の射程範囲と方法

2.1 本論文の射程範囲

本論文の射程範囲を明確にしておきたい。

第1に、本論文が焦点を当てているのは、経験的な研究の前半パートに収まることを前提としたレビューではなく、それ自体、1つの完結した作品としてのレビューである¹⁾。両者の最も重要な違いは、問題の射程範囲と抽象度である (Baumeister, and Leary, 1997; Callahan, 2010)。文献レビューの有用性は、単一の経験的研究よりもはるかに広範な問題に取り組むことができるということにある。1つないし少数の研究課題を解くことを目的とした経験的研究の場合、文献レビューパートでは、当該分野全体の中から特定のトピックへと絞り込むような範囲の限定が必要になる。著者が設定する研究課題や調査課題は、領域全体の課題に

対して極めて限定された範囲をカバーするに過ぎないからである。仮に全体を俯瞰するような問題からレビューを始めたとしても、最終的に著者は、局所的な問題へと議論を進めていかなければならない。対してレビュー論文の場合、領域全体を俯瞰し、多くの議論や経験的事実の間のパターンや関連性に焦点を当てることで、個別の研究課題の範囲を超えた問題に取り組むことができる。ある研究領域において、多くの議論や経験的事実の間に矛盾が生じていたり、様々なパターンが観察され、それらの間の整合性について研究者が把握しづらい状況が続いている場合、あるいはその領域において、個別の研究課題の範囲を超えた問題に取り組む必要が生じたときに、レビュー論文が執筆される、²⁾といってもいいだろう。

第2に、本論文の焦点は、先行研究の結果を数値的に要約することに主眼を置いたメタ分析 (meta-analysis) ではなく、先行研究の議論 (例えば、採用している理論、経験的な発見事実、あるいはそれらの関係性) の意味に注目するナラティブ・レビュー (narrative review) ³⁾である。のちに述べるように、先行研究の議論を要約する (summarize) という点に関して、両者の目的は共通している。両者の違いは、第1に、先行研究の中で蓄積された情報の量を数値によって要約するのか、文章によって行うのかという要約の手段、そして第2に、要約を超えて、既存の議論の統合や批判をも行うのか、という点にある。同じ仮説を検証する研究がすでに複数存在し、かつ、それらの結果について要約する必要があるような場合にはメタ分析が行われるべきだし、過去の研究の意味的なつながりを整理したり、再解釈を行ったり、異なる目的で行われた複数のトピックを結びつけようとする場合には、ナラティブ・レビューが選択されるべきなのである。先行研究で導かれた「量」を数値的に要約することに主眼を置くのがメタ分析、先行研究の「意味」に注目するのがナラティブ・レビューだといってもいいだろう。⁴⁾

本論文が焦点を当てるのは、(1) 先行研究の議論の意味に注目するナラティブ・レビューであり、その中でも、(2) 明確な方法論に基づいて文献を渉猟しようとするもの、また(3) それ自体が独立した研究であるようなタイプのレビュー論文である。先行研究にならって、このようなものを本論文では、統合的文献レビュー (integrative literature review) を呼ぶことにする。もちろん、以下で議論することの多くが、経験的な研究における文献レビューなどにも当てはまるはずであるが、本論文の基本的な射程範囲はあくまでこの統合的レビューにある。

2.2 文献レビューの範囲と分析の戦略

統合的文献レビューについてわかっていることを整理する、いわばレビュー論文に関わる議論の統合的レビューを行うことが、本論文の目的である。そのためには、本論文がレビューの対象とする文献の範囲を確定させる必要がある。本論文では、Torraco (2016) に

倣って、以下のような手続きでレビューの対象とする文献を選択した。⁵⁾ 文献の検索に際しては、「literature review」「integrative literature review」「research review」などの用語を用いて、2つのデータベース（Web of Science および Google Scholar）を用いて検索を行った。その結果、検出されたのは、6冊の書籍と30本のジャーナル論文（フルペーパーではないエッセイも含む）である。このうち6冊の書籍と25本の論文については、Torraco（2016）においても紹介されており、この5年ほどの間に新たに5本の文献が追加されたことになる。以下では、この36本をレビューの対象とする。

本論文では、検出された36本に対して、大きく分けて2つの観点からレビューを行う。1つ目は、それらが文献レビューについてどのような論点を提示しているかということ（先行研究では、良いレビューに関してどのような観点から議論が行われてきたのかということ）、2つ目は、それぞれの論点について、各論者がどのような主張を行なっているかということである。以下ではこの2点を中心に、これまでの議論を紹介する。

3 「良い文献レビュー」に関する議論の主要なポイント

36本の文献において提示された主要なポイントは、（1）文献レビューの機能、（2）涉猟する文献の探し方や決め方や範囲、（3）論文の各パートにおける記載事項（イントロ、方法、結論）、（4）先行研究の要約の仕方、（5）統合の仕方、（6）批判の仕方、そして（7）文章の書き方である。以下では、これら1つ1つについて、どのような議論が行われ、どのような主張がなされているのかということを確認していく。

3.1 レビュー論文の機能

1つ目の議論は、レビュー論文が当該分野あるいは分野外の読者に対して実際に何をもたらしているのか、つまり Merton（1968）のいう意味での機能（function）についての議論である。良質なレビュー論文が登場し、当該分野の議論の構造や問題がうまく整理されれば、それはその領域の発展を促し、領域全体がより広いコミュニティの中でのレリバンスを獲得する契機になりうる。逆に、良質のレビューが存在しない場合、当該分野の議論の構造が不明確なままであったり、問題を抱えたままの状態が放置され、結果、領域全体が停滞することになりかねない。著者がそのようなことを意図しているか否かに関わらず、当該分野の対内的/対外的な適応を促したり、研究コミュニティ内部のコミュニケーションを可能にしたりする役割をレビュー論文は果たすのである。ここではこの点をめぐるこれまでの議論を整理してみたい。⁶⁾

既存の36本の文献より、文献レビューの5つの機能（①要約、②批判、③統合、④研究領域の創造、⑤方向性の提示）を抽出することができる。このうち①②③⑤は、全てのレ

ビュー論文が備えるべき機能である。

1つ目の機能が、既存の議論の要約をする (summarize) という機能である (Bem, 1995; Sayer, 2018)。その領域においてはどのようなアプローチでどのような研究が行われており、何が分かっているのか、分かっていることは何か。こうしたことを確認して伝えること、しかも先行研究の情報量を大幅に集約して伝えることが、全てのレビュー論文の重要な機能である。ただし、この点を唯一の機能とするものは、レビュー論文として不十分である (Baumeister and Leary, 1997)。そのようなレビューは当該分野の知識の概観を示すことはできても、新しいアイデアや新しい解釈、既存の議論を包括するような結論を提供できない。要約は、レビュー論文の不可欠だが最小限の機能だといえる (Baumeister and Leary, 1997)。この点は、3.4で改めて取りあげる。

2つ目の機能が、先行研究の統合 (synthesize) である (Baumeister and Leary, 1997; Webster and Watson, 2002; Torraco, 2016; Sayer, 2018; Post, et al., 2020)。ここで統合とは、過去の文献を単に情報集約 (要約) するにとどまらず (Torraco, 2016)、種々の研究をつなぎ合わせて「結局どういうことがわかっているのか」「何が大事な発見なのか」といった、核心的な問題を明らかにすること (Post, et al., 2020)、そのためになんらかの新しいモデルや概念的枠組み、そのほか独自の視点を提供する創造的なプロセスを指す (Torraco, 2016)。情報量の削減を行うのが要約だとすれば、既存研究の情報に対してなんらかの質的なアレンジメントを加えるのが統合だといえる。統合の様々な形式については、3.5で取り上げることにする。

3つ目は、先行研究に対して批判を加える (criticize) という機能である (Baumeister and Leary, 1997; Pautasso, 2013; Torraco, 2016; Post, et al., 2020)。ここで批判とは、既存の議論の中身やそのあり方の長所と短所を特定し、文献間の不備や矛盾を明らかにすること、また当該研究領域において「当たり前になっている」ことに疑問を投げかけ、その問題について検討を行うことである (Torraco, 2005)。具体的には、概念や理論の起源、研究領域の発展の歴史、領域の強み、主要な結論、採用されている方法、対象としてきたサンプル、提示された結果や理論的説明に伏在する矛盾、研究者たちが前提としている (暗黙または明示的な) 仮定、理論や概念が当てはまる境界条件などに関して、批判的なレンズを通じて検討することを指す。批判の具体的な方法については、3.6で改めて議論したい。

4つ目に、レビュー論文には研究領域を創造する (conceptualize research area) という機能がある (Webster and Watson, 2002)。例えば、新規性の高い研究、いままさに立ち現れつつある研究の場合、レビュー論文は、必ずしも1つの研究領域として認識されていない、様々な媒体の様々な研究から得られた研究成果を独自の視点で結び、それらに新しい視点や理論を提供することが重要になる (Webster and Watson, 2002; Post, et al., 2020)。まだ1つ

の研究領域として確定された境界がなく、研究領域を端的に表すラベルもない研究群に対して、それらを要約・統合するレビューを行なった結果として1つの研究領域が立ち上がる、ということがしばしばある。契約の主観性や限定合理性といった一見するとバラバラの理論概念をつなぎ合わせ、古くから概念として存在していた心理的契約に明確な定義を与え、1つの研究領域として確立させた Rousseau (1989; 1995) などは、その典型といえよう。すでに研究蓄積が相当量ある複数の領域を横断的にレビューすることで、それらを架橋する新たな研究領域を切り開く、というパターンもある。例えば金井 (1991) は、リーダーシップ研究と管理者行動研究など、似て非なる研究領域を越境する形でレビューし、これらが交差するところに変革型ミドルマネジャーの行動を探索する新たな領域を創造している。

5つ目の機能は、先行研究の要約、統合、批判を前提に、研究領域の将来の方向性を提示し、研究を誘発すること (stimulating further research) である (Baumeister and Leary, 1997; Webster and Watson, 2002; Sayer, 2018⁷⁾)。

3.2 渉猟する文献の探し方や決め方や範囲

文献レビューの主要な機能の1つが要約にあるとして、その要約の対象となるのはどの先行研究の集合なのか。当該領域の主要な研究全てがレビューの対象となるシステムティック・レビューとは異なり、統合的文献レビューの場合、どの論文のどの部分を含めるか/省略するかに関して、選択の余地が多分にある。それだけに、文献の選択に関して、できる限り客観的な手続きを自ら設定する必要がある (Boote and Beile, 2005)。

範囲確定の具体的な手続きとして、Webster and Watson (2002) は、(1) トップジャーナルと主要なカンファレンスのプロシーディングスに掲載されたもの、(2) その論文において引用された論文、(3) Web of Science を使って (1) (2) で検出された論文が引用しているものをさらに特定する、というやり方を推奨している。こうした手続きは、著者が自身の考えを支持する研究だけを選択してしまったり、自らが思い描くストーリーラインに合わない研究を排除してしまったりすることを避けるという意味で重要である。(2) の手続きは、デジタル化されていない出版年数の古い研究をも渉猟範囲に入れることを可能にする。矛盾した結果、相互に折り合いのつかない論点、さらには古い年代の文献をもあわせて紹介し、正面から取り上げることで、より強固な議論へと鍛え上げていくことができるのである (Boote and Beile, 2005; Sayer, 2018)。

Webster and Watson (2002) の議論は、著者が「読む」文献の範囲を確定することに関わるものであるが、同時に、レビュー論文において「紹介」する具体的な文献の取捨選択に関しても、かなりの程度、著者に選択の余地がある。Coopers (1988) は、レビュー論文の著者が考量すべき以下のような基準をあげた上で、著者はそれらのうちいずれかを選択する

必要があるという。Coopers (1988) があげているのは、(1) 領域全体をカバーする網羅的なもの (領域全体の研究蓄積が相対的に少ない場合など)、(2) 分野全体を渉猟しつつも、その中から選択されたいくつかを紹介していくもの、関連して (3) 各トピックに関わる研究から、典型的なものや代表的なものを選択的にピックアップして紹介するもの、そして最後に、(4) 当該分野において相対的に重要なもの、中心的な役割を果たすものに限定するもの、といった基準である (Coopers, 1998)。レビューする領域の研究蓄積の状況や既存のレビュー論文の渉猟範囲など様々な要因によって、このうちどれを選択するかは変わってくるだろう。いずれにしても重要なのは、レビュー論文の著者が自身が選択している手続きを明確にすること、そしてそれを論文中に明記することである (Torraco, 2016; Sayer, 2018; Post et al., 2020)。

3.3 論文の各パートにおける記載事項 (イントロ, 方法, 結論)

実際に論文を執筆する段になった時、私たちはそこに何を、どう書けば良いのか。この点についても、すでにある程度の議論が行われている。

3.3.1 イントロパート

多くの論者がまず強調しているのが、イントロパートにおいて読者のリーダビリティを高めるということである (Baumeister and Leary, 1997; Baker, 2000; Sayer, 2018)。Baumeister and Leary (1997) は、レビュー論文の著者の多くが、イントロパートにおいて、当該トピックがどれだけ重要であり、興味をそそるものであるかという説明をおこなう努力を怠っていると指摘している。経験的研究がそうであるように、文献レビューにおいても、当該領域および自らのレビューの魅力や貢献点、レビューを行う目的を明確にしなければならない (Baker, 2000; Sayer, 2018)。当該領域においてすでにレビュー論文が存在する場合、あるいは新規性の高い研究や立ち現れつつある研究領域である場合には、そうした努力が特に必要になるだろう。

読者のリーダビリティを高めるためにイントロパートに盛り込まれるべき内容には、さらに、キー概念の定義や議論のバウンダリー、分析単位、著者が持ち込む価値観などがありうる (Webster and Watson, 2002)。主要な概念の定義が、早期に提示されることが読者のリーダビリティを高めることについては、改めていうまでもないだろう。議論のバウンダリーとは、レビューの対象となる理論や概念や経験的事実が当てはまる範囲を指す。例えばモチベーション研究の場合、組織行動論や産業組織心理学が対象とする仕事モチベーション (work motivation) に限定するのか、教育心理学が対象とする学習モチベーション (study motivation) をも含めるのかによって、レビューの内容はかなり変わってくるだ

ろう。またレジリエンスのように、個人レベル（Luthans, Vogelgesang, and Lester, 2006）や組織レベル（Vogus and Sutcliffe, 2007）など複数のレベルで研究が行われている概念に注目する場合には、そのどちらを対象とするか（あるいは全てを含むか）を明確にしなければならない。またテーマによっては、著者がどのような価値観に依拠してレビューを行うかを明記することが求められる場合もある（Whetten, 1989）。ジェンダー論やコミュニタリアニズムなど特定の規範的な立場をとる場合（Seitz, 2003; Weingarten, 1991）、経営者、従業員、人事部門、その他ステークホルダーのいずれかの読者を想定している場合など、である。こうした点を可能な限り自覚し、明記することがレビュー論文においても推奨される（Webster and Watson, 2002⁸⁾）。

3.3.2 方法パート

それ自体1つの完結した作品である統合的レビューには、レビュー対象となる文献の体系的（systematic）かつ再現可能な（replicable）渉猟の手続きを示した方法のセクションが必要である。文献レビューのためのデータベースが固有名詞付きで紹介され（e.g. google scholar, Web of Science）、それを用いてどのようなキーワードでもって検索がなされたか、その結果どのような文献が検出されたのかということに関する手続きが明示されているため、他の研究が著者を同じ手続きを踏むことが可能になるのである（Baumeister, 1997; Callahan, 2000; Webster and Watson, 2002）。

Callahan（2010）は、方法パートの執筆に際して、以下のような点を明記する必要があると指摘している。

- (a) 文献がどこで発見されたか。どのようなデータベースや検索エンジンを用いたのか。
- (b) いつ検索したか。データベースの内容は頻繁に変わるので、検索時点を明記することが重要である。
- (c) 誰が検索したか。
- (d) どのようにキーワードを組み合わせで文献を見つけたか。
- (e) キーワードの組み合わせごとにどれくらいの記事数が出現し、最終的にどれほどのカウント数となったのか。
- (f) なぜそれらの中から特定の論文が選択されたのか。

3.3.3 結論パート

レビュー論文の結論パートは、本論で行ってきた当該研究の要約・統合・批判を簡潔に要約しつつ、その領域の将来の方向性を提示するものでなければならない（Baumeister and

Leary, 1997; Webster and Watson, 2002; Sayer, 2018)。具体的には、(1) 何がわかっているのか (what we know) と (2) 何がわからなければならないかということ (what we need to know) を明確にし、(3) 現状、両者の間にどのくらいの差分があるかということを読者に提示する、ということである (Webster and Watson, 2002)。

その際、結論パートにおいて展開される (1)~(3) の内容と、本論で議論してきた内容との整合性に注意しなければならない。本論部分では極めて限定的な範囲について丁寧な要約と統合、批判をしていながら、結論パートに入った途端に、その範囲を大きく超えた大胆な結論を披露する、といったレビューがしばしばみられるようである (Baumeister and Leary, 1997; Webster and Watson, 2002)。先行研究が実際に何を語っているかではなく、自身が何を語りたいかが前面に出てしまっている、著者がレビューに先立って持っていた理論的視点がそのまま結論にまで影響を与えてしまう、いわゆる理論負荷性 (Hansen, 1969) の問題が過剰に起こっているからなのだろう。

これを回避するために Sayer (2018) は、結論パートで展開する重要な論点を、(要約と統合と批判を行う) 本論の中でも先取りしておくことを推奨している。例えば結論パートにおいて、「心理的契約研究においては、契約が固定的なものと捉えられており、時間とともに変化するという側面への注目がほとんどなされていない」という主張がなされるのであれば、本論で過去の研究を紹介する際にも、そうした視点が欠落しているということを各所において明記しなければならない。本論において議論が展開できないものは、レビュー論文の主要な結論とはなり得ない、ということでもある。

3.4 先行研究の要約の仕方

先行研究の情報量を適切に削減することがレビュー論文の1つの重要な機能であるとして、それは具体的にどのように可能になるのか。多くの論者が指摘している一般的なアドバイスが、先行研究の「著者」ではなく「内容」に焦点を当てる、というものである (Bem, 1995; Sayer, 2018)。例えば、服部 (2013) によって提示された「心理的契約の不履行と離職意思との関係は、その契約に対する従業員の期待水準によって調整される」という結果を紹介したい場合、「服部 (2013) によれば、心理的契約の不履行と離職意思との関係は、その契約に対する従業員の期待によって調整される」と書くよりも、「心理的契約の不履行と離職意思との関係は、その契約に対する従業員の期待水準によって調整されることが示されている (服部, 2013)」と書くことが推奨されている。レビューの目的は、あくまで研究者が発見した事実や行なっている議論の中身自体を紹介することであって、彼ら自身を紹介することではないからである (Bem, 1995)。またそうした研究に対して批判をする場合にも、研究者個人ではなく、その主張の内容に対して批判を加えるということも重要である (Bem, 1995;

Sayer, 2018)⁹⁾。

その上で個別の研究をどのように要約するか、である。「良くない書き方」としてしばしばあげられているのが、研究の方法や具体的な結果を記述せずに研究の結果を引用する、というものである (Baumeister and Leary, 1997)。提示する結果の内容だけでなく、その周辺情報をもあわせて読者に伝えることができなければ、提供される情報の価値はかなり減じられてしまう。具体的に Baumeister and Leary (1997) が「悪い例」としてあげているのは、「原因Xが結果Yをもたらす (文献)」という表現である。これは、その研究の結果に懐疑的な読者や、その結果について詳細に検討したい読者にとって、あまりにも不十分な情報である。提示する結果の紹介に終始し、その結果がどのようにもたらされたか、その周辺情報の記述を省略するということは、つまり文献レビューの著者が読者に対して、「私の言葉を信じてください」と主張しているに等しい (Baumeister and Leary, 1997)。「Aのサンプルにおいて、方法Bを用いて原因Xが結果Yに与える影響を検討したところ、結果Cであることがわかった (引用)」という情報があれば、読者はレビュー論文の結論が本当に既存研究の結果に合致しているかどうか、先行研究で得られている結果の一般性や方法論的な頑健さがどうか、ということ判断することができる。

実験室実験などを紹介する場合には、これよりも更に多くの情報が必要になる。この場合に推奨されているのが、紹介したい研究の研究手順を時系列で簡潔に紹介する、というものである (Bem, 1995)。例えば Bem (1995) は、Festinger and Carlsmith (1959) の古典的な実験研究を例に、実験状況を詳細に、しかし必要最小限の情報量で紹介するやり方を紹介している (Bem, 1995, p.177)。

60人の男子大学生が、3つの条件のうちの1つに無作為に割り振られた。1ドルの条件では、参加者はまず、個人的な実験セッションにおいて、長時間の反復的な課題を遂行するように求められた。その後彼は、「助手」として雇われ、1ドルを支払って、待っている仲間の学生 (共産黨員) に、「その課題が楽しくて面白い」と伝えるよう実験者に指示された。もう1つの条件下では、同じことをするために各参加者が20ドルで雇われた。そしてもう1つの統制条件下では、参加者は単にタスクに従事することになった。実験終了後、各参加者はアンケートでタスクをどれだけ楽しんだかということを回答した。その結果、1ドルの参加者は、20ドルの参加者よりも有意にタスクを楽しんだと評価していたが、統制条件下の参加者と間には差がなかった。

Bem (1995) は、この簡潔かつ漏れのない文章を書くまでに、何度も文章の書き直しを行なったと告白している。既存研究の情報量の要約を適切に行うために、自身の文章の幾度

にもわたる推敲が必要だということである。

3.5 統合の仕方

統合的レビューは、過去の研究の要約以上のものである (Baumeister and Leary, 1997; Webster and Watson, 2002; Torracco, 2016; Sayer, 2018; Post, et al., 2020)。少なくとも、「研究 X は A を示し、研究 Y は B を示し、研究 Z は C を実証した」と紹介しただけのものは、統合的レビューとはいえない (Sayer, 2018)。統合するとは、単に過去の文献を列挙したり要約したりするのではなく、新しいモデルや概念的枠組み、なんらかの新たな視点から、それらを整理したり編集したりすることである (Torraco, 2005)。既存研究の情報量の削減を行うのが要約だとすれば、統合とは、既存研究の情報に対して、なんらかの質的なアレンジメントを加えることだといっているだろう (Webster & Watson, 2002; Torracco, 2005; Denney & Tewksbury, 2013; Pautasso, 2013; Wee & Banister, 2016)。

では具体的に、統合はどのように行われるのか。これまでに提示されているのは、大きく分けて 4 つのアレンジメントである (Torraco, 2016)。

1 つ目は、研究のアジェンダ (research agenda) を提示することであり (Torraco, 2016), 具体的には先行文献の要約とそれらに対する批判的な分析に基づいて¹⁰⁾、研究者がその後に検討すべき刺激的な研究課題や命題を提供することである。例えば Connell, Certo, Ireland, and Reutzel (2011) は、シグナリング理論 (signaling theory) に関わる先行研究を渉猟し、同理論の構成要素となっている複数のキー概念を抽出した上で、その 1 つ 1 つに関する将来の研究課題を提示している。Avolio, Walumbwa, and Weber (2009) なども、将来の具体的な研究課題を提示した好例といえるだろう。ただ、研究領域の将来の方向性を提示し、研究を誘発することは、すでに述べたように、レビュー論文の必要不可欠の機能そのものでもある (Baumeister and Leary, 1997; Webster and Watson, 2002; Sayer, 2018)。したがってアジェンダの提示は、それ単独ではレビュー論文としての貢献にはならない (Torraco, 2016)。

2 つ目は、なんらかの分類 (taxonomy) を行うことである。典型的には、相互に直交する 2 つの次元からなる 4 つの象限を設定し、それぞれに該当する 4 つの原型 (archetypes) を識別する、というものである。例えば服部 (2016) は、組織行動研究における組織と個人の関わり合いに関わる複数の概念に関わる研究をレビューしたうえで、(1) それらの焦点が、組織と個人の間の「交換」にあるのか「統合」にあるのか、(2) 概念が想定している雇用関係の継続期間が「スポット」であるのか「長期繰り返し」であるのか、という 2 つの次元からなる 4 象限を設定し、各概念の布置連関を説明している。分類は、経営学のレビュー論文において、最も多用されるやり方である (Torraco, 2016)。

3 つ目は、代替的モデルや概念的フレームワーク (alternative models or conceptual frame-

works) の提示である。文字通り、既存のものとは異なるモデル、概念的フレームワークを提示することで、先行研究の再編を行うものである。例えば Brutus (2009) は、業績評価に関わる研究のトレンドが大きく、量的なレーティングの研究から質的なコメントへとシフトしていることを指摘した上で、両者を共に含んだ統合的なフレームワークを構築している。この種のレビューも経営学や組織行動論には多くみられる (Cable and Turban, 2001; Carlson and Connerley, 2003; 服部, 2013b; Call, Nyberg, and Thatcher, 2015)。

4つ目は、メタ理論 (meta-theory) の提示である。メタ理論とは、個別の理論の背後にあってその理論にももの見方や考え方、現象の捉え方を提示する理論、いわば理論についての理論である (Ritzer, 1992)。例えば組織行動論において、組織と個人の関わり合いを捉える概念は数多くあるが、それらの背後には、組織と個人とが同一の目標を追求し、その意味で一体化することが可能になるという Simon (1957) 由来の同一化理論と、組織と個人とは相互に独立した主体であり、両者の関係が維持されるためには、両者が行う交換が均衡している必要があるという Homans (1961) や Blau (1964) 由来の社会的交換理論が、それぞれメタ理論として存在している (太田, 1994; 服部, 2016; 2020)。組織コミットメントや組織同一化は主として前者に、心理的契約や組織サポートなどは後者に、それぞれ依拠している。このようなメタ理論があることで、研究者は、(1) 理論をより深く理解したり、(2) それに基づいて新しい理論を構築したり、(3) 諸理論を包括するパースペクティブを提示したりすることができる (Ritzer, 1992)。通常の経験的な研究において、こうしたメタ理論にまでさかのぼって議論がなされることは少ない。むしろ、メタ理論が規定するもの見方や考え方、現象の捉え方を所与として、研究が展開されることの方が多い。

ただしレビュー論文においては、こうしたレベルにまで敢えて遡ることで、その領域の研究者たちが持っている集合的なもの見方を指摘したり、その限界を明らかにしたりすることで実り多い議論ができることが多々ある。例えば Salancik and Pfeffer (1978) は、Murray (1938) などの欲求理論および欲求を喚起する職務特性に注目した Hackman and Lawler (1971) などをレビューした上で、これらが個人の社会的な情報処理過程を見過ごしてきたことを指摘し、既存の議論を社会的情報処理の視点から統合した、理論モデルを提示している。その際に彼らが援用しているのは、Berger and Luckman (1966), Schutz (1967), Weick (1979) など、組織行動論の外部にある理論である。Salancik and Pfeffer (1978) 自体が、現実の理解における当時者の主観性に注目したこれらの文献に直接依拠するわけではなく、むしろ、こうした文献の基本的な考え方を組織行動論の中に取り込み、自身の社会的情報処理理論を構築している。彼らがやったのは、まさにメタ理論の導入である。外部の視点を導入することで、既存の議論を否定するというよりも、むしろそれらを取り込みながらより頑健な議論が可能なモデルを提示した、優れた例の1つといえるだろう。¹¹⁾

3.6 批判の仕方

批判とは、すでに述べたように、既存の文献の長所と短所を特定し、文献間の不備や矛盾を明らかにすることを指す (Torraco, 2016)。レビューにおける批判のあり方については、まだまだ議論が十分でないため、ここでは既存の議論を参照しつつ、筆者なりに重要と考える批判のポイントについてまとめておきたい。レビュー論文において、展開可能な批判には、例えば以下のようなものがある。

- (1) 議論の矛盾や不一致
- (2) 集合的な無知
- (3) 概念や理論の起源や発展の歴史
- (4) 研究の基本仮定
- (5) 採用されている方法の問題
- (6) 主たる調査対象の問題
- (7) 経験的な世界とのズレ
- (8) 概念の曖昧性や再定義の必要性
- (9) 理論や概念が当てはまる境界条件の再検討

1つ目の、最もオーソドックスなやり方は、すでに展開されている議論の矛盾や不一致を指摘することである (Torraco, 2016)。ある研究においてはXとYの間に正の相関が、もう1つの研究においては同じ変数の間に負の相関が観察されたことを指摘し、そのような結果の不一致や矛盾がなぜ起こったのか、どのようにすればそれが解消されうるか、といったことを議論するというものである。

2つ目は、特定の研究領域において、多くの研究者が図らずも見過ごしてきた論点や、研究の対象となつてこなかった重要な問題を指摘するというものである。研究が進展すると、多く研究者は過去の経験的研究の成果に立脚して自らの研究課題を立てるようになる。その結果、結果の出やすい領域には多くの研究者が注目する一方で、結果の出にくい（しかし重要な）領域に対しては研究者の目が向けられなくなることがしばしばある。例えば心理的契約研究においては、多くの研究者の注目が、会社側による契約の不履行とその成果の間の因果関係の解明に集められてきた (服部, 2013a; 2013b; Hattori, 2018)。これには会社による不履行が社員の様々な行動や心理に対して高い説明力を持つという意味で、研究者にとって都合が良いテーマであったという事情がある (服部, 2013b)。その結果、会社と個人の心理的契約をどのようにアレンジするかという重要な問題が、ほとんど顧みられることなく置き去りにされてきたのである (Hattori, 2018)。こうした集合的な無知の状態を指摘しするこ

とで、将来の研究の方向性を示すことができる。

3つ目は、概念や理論の起源や発展の歴史に関わる批判である。研究の蓄積が進み、当該分野が成熟期に差し掛かると、初期の多種多様なトピックの中から、特定のものが選択・淘汰され、研究者の努力が一部のトピックに集中するようになっていくことがよくある（金井, 1991; 鈴木, 1998; 服部, 2013a; 2013b）。実証分析のための頑健な測定尺度が整備された領域では、とりわけそうした現象が起こりやすい（金井, 1991; 服部, 2013b）。このような場合、当該領域の主要な概念や理論の起源にまで遡ることで、当初持ち合わせていたトピックの多様性や柔軟性を指摘したり、またそれが研究の発展の中でどのように固定化され、柔軟性を失っていったかを指摘するようなレビューを行うことで、その領域が図らずも見失っていた（古くて）新たなトピックが見えてくることがある。この種のレビューとしては、金井（1991）、鈴木（1998）、服部（2013a）服部（2013b）、松嶋・貴島・福本（2017）などがある。¹²⁾

4つ目は、既存研究の背後にある基本仮定を明確にするというものである。経営学に限らず社会科学者は、経験的現実を捉えようとするとき、当人が自覚するか否かに関わらず、人間や社会の本質についての何らかの仮定を持ち込む。例えば、多くの経済学者が、人間の（部分的な）合理性と市場メカニズムの有能性を前提に議論を展開する。統一のパラダイムを持たない経営学の場合、研究者の持つ基本過程にはこれよりももう少しバリエーションがみられるかもしれない（Burrell and Morgan, 1979）。研究が成熟するにつれて、そのような仮定は、分野内の多くの研究者に共有され、当人たちがすら気づかない暗黙のものとなっていく（Post, et al., 2020）。そのことで、一方では、既存の枠組みに沿った研究の効率的な蓄積が可能になるわけであるが、他方で、領域全体として探求される問題に偏りが出たり、結果の解釈や議論の幅が極端に狭められたりといったことが起こる（Foss and Hallberg, 2014）。そのような場合、既存研究の背後にある基本仮定にまで踏み込んだ文献レビューを行うことで、既存研究の研究者たちが暗黙のうちに前提としてきた事項が浮かび上がり、それに代わる仮定や異なった前提に立った理論的見解、研究方法などを提示する道が開かれるのである（Post, et al., 2020）。経済主体の完全合理性を仮定した既存の古典派経済学を批判した Simon（1957）、フォロワーに対するリーダーの影響を客観的に分析することに注力してきた既存のリーダーシップ研究を批判し、フォロワーによるリーダーシップの社会的構成（social construction）に注目した Meindle（1995）などが好例だろう。

5つ目と6つ目は、既存研究の調査方法に関わるものである。採用されている方法の問題や、先行研究が対象としている対象の偏りを指摘するというものである。実証研究の少なさ（多さ）を指摘したり、外的妥当性の低い実験室実験ばかりが行われていることを指摘したりするのが前者、特定の国の到底のサンプルばかりを対象とした研究が多いことを指摘する

のが後者の例である。

7つ目は、経験的な現実とのズレを指摘するというものである。国際化やリモートワークの導入、人工知能の進化など、社会経済的なトレンドや経験的世界の側の変化によって、それまでは妥当であった既存理論の見方が陳腐化したり、場合によっては現実から遊離してしまうようなことがある。このような場合に、新たに現れつつある経験的世界に対して既存の理論や概念がどのような限界を抱えているか、新たに導入する理論や概念によってどのように世界の見え方がかわるかを問う、というものである (Post et al., 2020)。経験的世界と新たな理論的視点という複数の視点を持つことで、異なる理論的世界間でのコミュニケーションを可能にし (Wilmott, 1993)、かつ、経営理論が過度に狭い世界へと嵌まり込むことを防ぐことができる (Donaldson, 1998)。Dineen and Allen (2013) や Bal and Hornung (2019) などが、このようなタイプのレビューの好例だろう。

8つ目が、概念が持つ潜在的な曖昧さを明確にし、それを発展可能な形で明確化することである (Post et al., 2020)。ここでいう明確な概念とは、(1) 意味内容を明確に示す正確で、分かりやすい定義があり、(2) 経験的現実を十分に反映する丁寧な範囲設定がなされており、(3) その理論空間における論理的整合性が保たれているものである (服部, 2020; Post et al., 2020)。概念が登場した当初、それには確たる定義もなく、したがってそれが意味するところの厳密な範囲がかなり不明確なままになっていることが多い。また一度定義がなされたとしても、研究分野が進展していくにつれて、概念の実質的な意味に変化が生じたり、経験的な現実との間にズレが生じたりして、曖昧さが露呈することがある。このような場合に、そもそもその概念がどのように使われており、そのことがどのような問題を引き起こしているのか、という観点から議論を行うレビューが登場することがある (服部, 2016)。過去30年にわたって研究されてきた心理的契約の概念を再定義することで、このトピックを組織行動論の一大研究領域へと発展させた Rousseau (1989)、同じく古くから概念として存在した組織同一化を再定義した Mael and Ashforth (1992) など、組織行動研究の中で長きにわたって研究蓄積が続いているトピックには、この種のレビュー論文が多い (服部, 2016)。

9つ目は、理論や概念が当てはまる境界条件を再検討するというものである。Whetten (1989) は概念の境界条件を、「理論モデルから生成された命題に制限を設けること」(p. 492) と定義している。その理論や概念がどの範囲に当てはまり、反対にどこに当てはまらないのかを明確にすることは、レビュー論文の重要な貢献である。広範に用いられてきた概念の適用範囲に限定をかけたり、逆に、限定的に用いられてきた概念の適応範囲がそれまで想定されてきたよりも広いことを示したり、といった議論である。図らずも同じような概念を用いてきた複数の領域を横断的にレビューし、それらの間の共通性を抽出することで、学際的な境界を解消するというのが、後者の例といえよう (Post et al., 2020)。例えば Rous-

seau, Sitkin, Burt, and Camerer (1998) は、社会学や心理学や組織行動論で用いられてきた信頼 (trust) という概念を精査し、お互いの議論にかなりのオーバーラップがあること、したがってお互いの研究成果が相当程度相互参照可能である可能性を指摘している。このようなレビューは、進行しつつある学問的なサイロを解消することにも貢献する (中川・服部・佐々木・宮尾, 2020)。

3.7 文章の書き方

最後の論点が、レビュー論文における文章の記述に関わるものであるが、これは「自身や他の研究者の主張とエビデンスとが区別されているか」とか「文章の時制が一貫しているか」といった極めて具体的な点になるため、文末の Appendix に一括して掲載することにする。またレビュー論文における文章の書き方については、田中・市川 (2011) でも詳細な議論が行われているので、是非とも参照されたい。

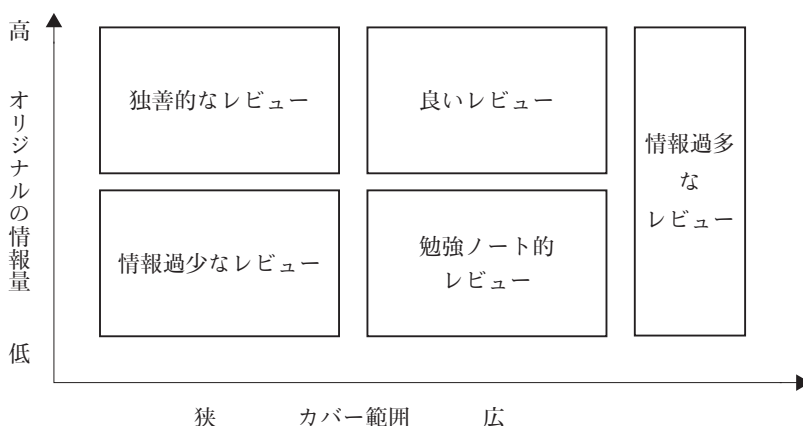
4 研究分野の創造的な未来のために

本論文では、これまでに出版された36本の文献を手掛かりに、1つの完結した作品としての統合的レビュー論文について検討してきた。本論文で紹介した主要な論点を要約しつつ、レビュー論文の執筆を目指す著者にチェックリストとして使用していただくために作成したのが Appendix にある「統合的文献レビューを書く際のチェックリスト」である。

「良いレビュー論文」とは何か、本論文なりのまとめをして終わりたい。図1は、良いレビューを構成する要件を、2軸4象限で表現したものである。¹³⁾

1つ目の軸は、そのレビューが当該領域に関して蓄積されてきた研究を広くカバーしてい

図1 良いレビューとは何か



る度合い、2つ目の軸は、そのレビューがオリジナルの価値を提供している度合いである。本論文では、全てのレビュー論文が備えるべき機能として、(1) 要約、(2) 批判、(3) 統合、(4) 方向性の提示の4つを提示したが、このうち(1)が1つ目の軸に、(2)～(4)が2つ目の軸に深く関わっている。

良いレビューとは間違いなく、既存の研究の多くを網羅したものであるが、レビュー論文の中に盛り込む研究量が多くなればなるほど、レビュー論文として読みやすさは低下する。全ての研究を網羅しようとしたり、1つ1つの研究の些末な情報を漏れなく紹介しようとするれば、読者にとってその論文は情報過多でしか無くなる。かといって、渉獵する範囲を過小に狭めてしまうと、今度は読者にとっての新たな情報がほとんどないもの(情報過小)になりかねない。そこで重要になるのが、膨大な情報をいかに要約し、正確に伝達するかということであり、それこそが本論文3.4で紹介した要約に関わる議論である。

ただし要約それ自体が、そのレビュー論文のオリジナリティとなることはない。時間をかけて当該領域の文献を読み進めていけば、仮にそのレビュー論文を読まなかったとしても、読者は同じ知識を手に入れることができるはずであるからである。もちろんこの場合も、レビュー論文は、「時間の節約」という重要な機能を提供してはいる。ただしその価値は、レビュー論文の研究者が当該研究領域に対して行なっている貢献という意味でいえば、極めて限定的であると言わざるを得ない。「勉強ノート」の域を出ない、といってもよいだろう。

レビュー論文におけるオリジナリティとは、(2) 批判、(3) 統合、(4) 方向性の提示によって担保されるものである。先行研究の多くが、先行研究の単なる要約を超えて、統合と批判と将来を強調しているのは、それらこそが、レビュー論文のオリジナリティだからである。(2) 批判(3) 統合(4) 方向性の提示という3つの機能をすべて果たす必要があるという意味で、レビュー論文におけるオリジナリティとは、図1で描かれている以上に複雑なものである。あわせて、オリジナリティがそれ単独では良いレビューの要件とはなり得ないこともまた、重要である。既存研究を独自の視点から批判し、なんらかの新しい視点を導入していたとしても、それが極めて限定的な範囲のレビューに基づくものであったり、膨大な先行研究を効率よく要約しそこなっていたとすれば、そこから導出された「将来」は、著者が勝手に思い描いた独善的なものでしかない可能性が高い。良いレビュー論文とは、十分に広い既存研究の広がりをも適切に要約し、かつ、そうして要約した世界に対して独自の視点から批判を加えたり、統合したりすることで、読者には見ることでできなかったその領域の新しい未来像を提示したものである、といえそうである。

注

- 1) 経験的研究の前段としてのレビュー、とりわけ学位論文に含まれる文献レビューについての議論については、Boote and Beile (2005) や Randolph (2009) を参照していただきたい。Boote and Beile (2005) は、学位論文の文献レビューの質を評価する方法について、網羅性、総合性、方法論、意義、レトリックの5つのカテゴリーからなる12の基準を提示している。同じく Randolph (2009) も、学位論文に含まれる文献レビューの質に関するガイドラインを示し、学位論文執筆者のための自己評価ツールを開発している。経験的研究にとっての文献レビューの価値について議論したその他の文献としては、例えば、Becker (1986; 2007) がある。
- 2) Baumeister and Leary (1997) は、経験的研究とレビューの違いを、そのほかに3点あげている。1つ目は、事後的な理論化である。経験的な研究とりわけ実証研究においては、経験的調査に先立ってレビューパートで自身の理論的立場を明確にし、それに立脚して仮説を構築することを求められる。経験的な結果がわかった後でそこに任意の理論を当てはめることは、統計的な現象においてしばしば発生する擬陽性の問題（ランダムな変動によって偶然にもたらされた結果が「正しい」かのように思わせるという問題）を助長してしまうからである。これは研究領域の汚染以外の何物でもない。レビュー自体を目的とした研究においては、この問題は起こりにくい。起こるとすれば、その論文が少量の対象とする数十から数百の研究が、いずれも統計的な偶然によって誤った結論を指し示していることが必要であるが、これはまずあり得ないことである。のちに述べるように、この種のレビュー論文においては、文献を読んだ後に理論を検討したり、新しい理論を打ち立てることは、単に許されるだけでなく、むしろ積極的に歓迎されることである。2つ目は、「影響がない」という結果に価値を置くことである。経験的な研究においては、「影響がない」という結果が評価されないことが多い。例えば、XとYの間に95%水準で有意な関係が「ない」ことを報告した論文は、トップジャーナルには掲されにくい。文献レビューの著者は、このようなプレッシャーから大幅に軽減されているし、そうあるべきである。文献レビューにおいては、既存の経験的証拠だけでは、研究課題に答えるには不十分であるという結論を出すことにも十分な意味がある。3つ目は、結論の違いである。多くの実証研究においては、「帰無仮説が棄却されるか、棄却に失敗するか」という2つの可能性を検証し、そのうちの1つだけが当該研究の結果として主張される。結論は常に、「帰無仮説が棄却された」か「棄却されなかった」かの2択なのである。さらに言えば、多くのジャーナルにおいては、「帰無仮説を棄却できなかった」という結果は、本質的な貢献でないとみなす傾向があるから、結局、この種の研究で見られる唯一の結論は、「帰無仮説が棄却された」でしか無くなる。対して文献レビューは、様々な結論に開かれた研究といえる。イエスかノーかの二項対立の結論に向かって議論を進めるだけでなく、「結果が矛盾している」ということも含めた、オープンな議論が展開されるのである。
- 3) メタ分析的レビューを行う方法についての議論については、Hunter and Schmidt (2004) などを参照されたい。
- 4) 文献レビューの範囲や渉猟の手続きに関する情報を明記する必要がある、など両者には共通点が多いことも事実である。
- 5) ここで採用した手続きは、この後に紹介する、統合的文献レビューの一般的なやり方とは若干異なっている。例えば Webster and Watson (2002) は、渉猟する文献の範囲を、(1) トップジャーナルの掲載論文および主要な学会のプロシーディングス、(2) それらのペーパーが引用

してる文献, (3) Web of Science などの検索機能を用いる, という3段階を推奨している。ところが本論文の場合, 渉猟する論文が特定の研究領域ではなく, 社会科学の様々な領域に渡っており, トップジャーナルや主要な学会を特定することができない。そこで(1)および(2)のステップを飛ばして, (3)から文献の探索を開始した。

- 6) 様々な機能がレビュー論文にあるということ, その論文の著者がそうした機能を予め意図してレビューを書いているということとは, 別の問題である。先行研究では, 「目的」と「機能」とを特に区別せずに議論がなされているが, ここでは, 本人がその論文によって何を目指すのかという主観的意向である「目的」と, それが結果として果たすことになる「機能」とを別物と考える (Merton, 1968)。そしてここでは, 著者が何を意図したかということよりも, その論文が結果としてどのような機能を果たしたか, ということを重視したい。
- 7) このような機能を果たすことがレビュー論文には求められるわけであるが, これらのウェイトや各機能の具体的な意味内容には, 当該領域の置かれた状況により, 若干のバリエーションがありうる。例えば新規性の高い分野, いままさに立ち現れつつある分野の場合, 必ずしも1つの研究領域として認識されていない, 様々な媒体の様々な研究から得られた研究成果を独自の視点で結び, それらに新しい視点や理論を提供することが必要になる (Webster and Watson, 2002; Post, et al., 2020)。反対に, 成熟した研究分野の場合, 研究蓄積量が膨大であり, それらがともすれば複数のディシプリンの複数の研究分野に分散して蓄積されてしまい, 結果, 相互に微妙にオーバーラップした異なる理論的な視点が採用されるようになることが多い。したがってこの場合, レビュー論文の著者には, 分断された諸研究の橋渡しをすることが求められる (Toracco, 2016; Post, et al., 2020)。
- 8) もっとも, こうした点をイントロで明記するべきか否かについては, レビュー論文の対象となるトピックや展開したい議論の内容によって, 若干の違いがある。例えば, 特定の概念に注目し, その捉え方や定義自体を議論したい場合, 全体の議論に先立ってイントロパートで定義を行うわけにはいかないかもしれない。むしろ, 論文全体を通じて定義が確定されていくという論文の展開もありうるだろう。どのような立場をとる研究者であれ, 本来的には自身が持つ価値的な視点から自由ではいられないはずであるが, 多くの場合, 経験的研究やレビュー論文においてそうした立場が表明されることはない。それによって問題が起こることもまずないだろう。ただ, ある概念や理論について, 既存の研究者たちが知らず知らずのうちに特定の価値観を持ち込んでことを指摘することで研究者たちの視点を相対化する, といったレビュー論文を展開することには大きな価値がある。組織行動論においてこうした議論を展開した数少ない例として, Bal and Hornung (2019) をあげることが出来る。彼らは, 組織と個人の関わり合いを捉えた心理的契約と特別扱い (i-deals) というそれぞれの概念の背後には, 研究者たちのリベラリズム, リバタリアニズム, そして個人主義的な価値観があること, 近年のその中で特別扱いへと関心が集まっている背景には, 研究コミュニティや実践家の中で, リバタリアニズム的価値観に賛同する人が増えている可能性があることなどを指摘している。
- 9) 過去の研究の著者ではなく, 著者が提示した中身にフォーカスするというのは, 総論としては大事な指摘であるが, 実際には, 「服部 (2013) によれば……」という紹介をした方が良い場合もあると筆者 (服部) は考えている。というのも, 服部 (2013) という表記が意味しているのは, その研究の著者自身ではなく, その著者によって発表された研究の方であり, したがって服部

(2013) という表記をしたとしても、それが研究内容ではなく著者を紹介したことには必ずしもならないからである。また、その研究の著者が当該領域において繰り返し重要な貢献をし続けた場合など、著者の氏名を読者に対して紹介することに積極的な意味がある場合もある。「紹介すべきは著者ではなく研究内容事態である」という大原則を念頭に置きつつ、具体的な紹介の仕方については、レビュー論文の著者が適宜判断すると考えるのがベストなのだろう。

10) 批判の具体的なあり方については、改めて取り上げる。

11) Torraco (2016) は、統合のもう 1 つの方法としてメタ分析をあげているが、本論文はこれを省略した。メタ分析の主要な目的が先行研究で報告された数値の要約それ自体にあるのに対して、すでに述べたように、統合的レビューの目的は、既存の知見を統合し、それに対して批判を加えることにあるからである。もちろん、メタ分析的に情報を要約した上で、その数値に対して批判を加えたり、新たな理論的な視点によりそれらを統合するというタイプの論文もありうる (e.g. Liao, Wayne, and Rousseau, 2016)。ただしメタ分析それ自体の機能は、あくまで数値の要約であり、それを行うことがすなわち既存の議論を「統合」したことにはならないと考える。

12) Stinchcombe (1982) は、当該分野の古典の文献に立ち返ることの価値を 6 つの点に整理している。1 つ目は基本的な考え方を提供するソースとしての価値、2 つ目は後続の研究者にとっての直感やヒントの源としての価値、3 つ目は当該分野の研究者に集合的記憶を提供し、連帯意識をもたらすという価値、4 つ目は優れた研究の見本例としての価値、5 つ目は未熟な研究者に対する発達課題を提示する価値、6 つ目はレビュー論文の筆者の当該分野へのロイヤルティを示す価値である。このうち本論文に深く関わるのは、1 つ目や 2 つ目の点であろう。

13) この図は田中・市川 (2011) より着想したものである。

参 考 文 献

- Avolio, B. J., Walumbwa, F. O., and Weber, T. J. (2009). Leadership: Current theories, research, and future directions. *Annual Review of Psychology*, 60, 421-449.
- Baker, M. J. (2000). "Writing a literature review." *The Marketing Review*, 1, 219-247.
- Bal, P. M., & Hornung, S. (2019). Individualization of work: from psychological contracts to ideological deals. In *Handbook of research on the psychological contract at work*. Edward Elgar Publishing.
- Baumeister, R. F., and Leary, M. R. (1997). "Writing narrative literature reviews." *Review of General Psychology*, 1(3), 311-320.
- Becker, H. (1986; 2007) *Writing for social scientist: How to start and finish your thesis, book, or article*. The University of Chicago Press.
- Bem, D. J. (1995). "Writing a review article for Psychological Bulletin." *Psychological Bulletin*, 118(2), 172-177.
- Berger, P. and Luckman, (1966). *The Social Construction of Reality*. Boston: Allyn & Bacon.
- Blau, P. (1964). *Exchange and Power in Social Life*. New York: Wiley.
- Boote, D. N., and Beile, P. (2005). "Scholars Before Researchers: On the Centrality of the Dissertation Literature Review in Research Preparation." *Educational Researcher*, 34(6), 3-15.
- Brutus, S. (2009) "Words versus Numbers: A theoretical exploration of giving narrative comments in performance," *Human Resource Management Review*, 20(2), 144-157.

- Burrell, G., and Morgan, G. (1979). *Sociological paradigms and organizational analysis*. London : Heinemann.
- Cable, D. M., and Turban, D. B. (2001) "Establishing the dimensions, sources and value of job seekers' employer knowledge during recruitment." *Research in Personnel and Human Resources Management*, 20, 115-163.
- Call, M. L., Nyberg, A. J., and Thatcher, M. B. (2015) "Stargazing: An Integrative Conceptual Review, Theoretical Reconciliation, and Extension for Star Employee Research." *Journal of Applied Psychology*, 100(3), 623-640.
- Callahan, J. L. (2010). "Constructing a manuscript: Distinguishing integrative literature reviews and conceptual and theory articles." *Human Resource Development Review*, 9, 300-304.
- Carlson, K. D., and Connerley, M. L. (2003). "The staffing cycles framework: Viewing staffing as a system of decision events." *Journal of Management*, 29(1), 51-78.
- Connelly, B. L., Certo, S. T., Ireland, R. D., and Reutzel, C. R. (2011). "Signaling theory: A review and assessment." *Journal of management*, 37(1), 39-67.
- Cooper, H. M. (1988). "Organizing knowledge syntheses: A taxonomy of literature reviews." *Knowledge in Society*, 1, 104-126.
- Denney, A. S., and Tewksbury, R. (2013). "How to write a literature review." *Journal of Criminal Justice Education*, 24(2), 218-234.
- DiMaggio, P. J. (1995). Comments on What theory is not. *Administrative Science Quarterly*, 40(3), 391-397.
- Dineen, B. R., and Allen, D. G. (2013). "Internet recruiting 2.0: Shifting paradigms." *The Oxford handbook of recruitment*, 382-401.
- Donaldson, L. (1998). "The myth of paradigm incommensurability in management studies: Comments by an integrationist." *Organization*, 5, 267-272.
- Festinger, L., and Carlsmith, J. M. (1959). "Cognitive consequences of forced compliance." *The Journal of Abnormal and Social Psychology*, 58(2), 113-121.
- Foss, N. J., and Hallberg, N. L. (2014). "How symmetrical assumptions advance strategic management research." *Strategic Management Journal*, 35(6), 903-913.
- Hackman, J. R., and Lawler, E. E. III, (1971). "Employee reactions to job characteristics." *Journal of Applied Psychology Monographs*, 55(3), 259-286.
- Hansen, N. (1969). *Perception and Discovery; An Introduction to Scientific Inquiry*. San Francisco : Freeman, Cooper.
- Hattori, Y. (2018). Design of Psychological Contracts in Japanese Firms and Their Binding Force. *Journal of Organizational Culture, Communications and Conflict*, 22(1), 1-28.
- Homans, C. G. (1961). *Social Behavior; Its Elementary Forms*. New York: Harcourt, Brace & World.
- Hunter, J. E., and Schmidt, F. L. (2004). *Methods of meta-analysis: Correcting error and bias in research findings*. Sage publications.
- Liao, C., Wayne, S. J., and Rousseau, D. M. (2016) "Idiosyncratic deals in contemporary organizations: A quantitative and meta-analytical review," *Journal of Organizational Behavior*, 37, 9-29.

- Luthans, F., Vogelgesang, G. R., and Lester, P. B. (2006). "Developing the psychological capital of resiliency." *Human Resource Development Review*, 5(1), 25-44.
- Mael, F., and Ashforth, B. E. (1992). "Alumni and their alma mater: A partial test of the reformulated model of organizational identification." *Journal of Organizational Behavior*, 13, 103-123.
- Meindl, J. R. (1995). "The romance of leadership as a follower-centric theory: A social constructionist approach." *The leadership quarterly*, 6(3), 329-341.
- Merton, R. K. (1968) *Social Structure and Social Theory*, Free Press. (森他訳『社会理論と社会構造』みすず書房).
- Murray, H. A. (1938). Needs, viscerogenic and psychogenic. *Milestones in motivation: Contribution to the Psychology of Drive and Purpose*, 364-371.
- Pautasso, M. (2013). "Ten Simple Rules for Writing a Literature Review". *PLOS Computational Biology*, 9(7), 1-4.
- Post, C., Sarala, R., Gatrell, C., and Prescott, J. E. (2020) "Advancing theory with review articles." *Journal of Management Studies*, 57(2), 351-376.
- Randolph, J. (2009). "A guide to writing the dissertation literature review." *Practical Assessment, Research and Evaluation*, 14(1), 1-13.
- Ritzer, G. (1992). "Metatheorizing in Sociology: Explaining the Coming of Age." G. Ritzer (ed.) *Metatheorizing*, Newbury Park: Sage, pp. 7-26.
- Rousseau, D. M. (1989). "Psychological and implied contracts in organizations." *Employee responsibilities and Rights Journal*, 2(2), 121-139.
- Rousseau, D. M. (1995) *Psychological contract in organization: Understanding of written and unwritten agreements*. Sage Publications.
- Rousseau, D. M., Sitkin, S. B., Burt, R. S., and Camerer, C. (1998). "Not so different after all: A cross-discipline view of trust." *Academy of Management Review*, 23(3), 393-404.
- Salancik, G. R., and Pfeffer, J. (1978). "A social information processing approach to job attitudes and task design." *Administrative Science Quarterly*, 23(2), 224-253.
- Salipante, P., Notz, W., and Bigelow, J. (1982). "A matrix approach to literature reviews." *Research in organizational Behavior*, 4, 321-348.
- Sayer, E. J. (2018) "The anatomy of an excellent review paper." *Functional Ecology*, Vol. 32: 2278-2281.
- Schutz, A. (1967). *The Phenomenology of the Social World*. Evanston, IL: Northwestern University Press.
- Seitz, J. A. (2003). "A communitarian approach to creativity." *Mind, Culture, and Activity*, 10(3), 245-249.
- Simon, H. A. (1957). *Models of Man*. New York: Wiley.
- Stinchcombe, A. L. (1982) "Should sociologists forget their Fathers and mothers?" *The American Sociologist*, 17, 2-11.
- Torraco, R. J. (2005). "Wrighting integrative literature reviews: Guidelines and examples." *Human Resource Development Review*, 4, 356-367.
- Torraco, R. J. (2016). "Writing integrative literature reviews: Using the past and present to explore the

- future.” *Human Resource Development Review*, 15(4), 404-428.
- Vogus, T. J., and Sutcliffe, K. M. (2007). “Organizational resilience: towards a theory and research agenda.” In *2007 IEEE International Conference on Systems, Man and Cybernetics* (pp.3418-3422). IEEE.
- Webster, J., and Watson, R. T. (2002). “Analyzing the past to prepare for the future: Writing a literature review.” *MIS Quarterly*, 26(2) xiii-xxiii.
- Wee, B. V., and Banister, D. (2016). “How to write a literature review paper?.” *Transport Reviews*, 36(2), 278-288.
- Weick, K. E. (1979). *The Social Psychology of Organizing 2nd ed.* Reading, MA: Addison-Wesley.
- Weingarten, K. (1991). “The discourses of intimacy: Adding a social constructionist and feminist view.” *Family process*, 30(3), 285-305.
- Whetten, D. A. (1989). “What constitutes a theoretical contribution?” *Academy of Management Review*, 14(4), 490-495.
- Wilmott, H. (1993). “Breaking the paradigm mentality.” *Organization Studies*, 14, 681-719.
- Yorks, L. (2008). “What we know, what we don’t know, what we need to know: Integrative literature reviews are research.” *Human Resource Development Review*, 7, 139-141.
- 太田肇 (1994) 『日本企業と個人：統合のパラダイム転換』 白桃書房.
- 金井壽宏 (1991) 『変革型ミドルの探求：戦略・革新指向の管理者行動』 白桃書房.
- 鈴木竜太 (1998) 『組織と個人：キャリアの発達と組織コミットメントの変化』 白桃書房.
- 田中麻紗子・市川伸一 (2011). 「オリジナリティのある文献レビューに向けて：大学院の講演者になるゼミの実践から」『東京大学大学院教育学研究科紀要』 51, 203-215.
- 中川功一・服部泰宏・佐々木将人・宮尾学 (2020) 「分断に架橋する：組織調査プロジェクトが目指すもの」『組織科学』 53(4).
- 服部泰宏 (2013a) 『日本企業の心理的契約：組織と従業員の見えざる約束 [増補改訂版]』 白桃書房.
- 服部泰宏 (2013b) 「心理的契約研究の過去・現在・未来：50年にわたる研究の到達点と課題」組織学会編『組織論レビュー I 組織とスタッフのダイナミズム』 pp. 147-186.
- 服部泰宏 (2016) 「人事管理の基底として個人-組織関係：欧米における研究の系譜と日本型マネジメントへの示唆」『横浜経営研究』 37(1), 85-109.
- 服部泰宏 (2020) 『組織行動論の考え方, 使い方』 有斐閣.
- 服部泰宏・矢寺顕行 (2018) 『日本企業の採用革新』 中央経済社.
- 松嶋登・貴島耕平・福本俊樹 (2017) 「組織行動論の本州を見極める：二元関係論, 組織開発, アクション・サイエンス」『国民経済雑誌』 216(2), 31-55.

Appendix: 統合的文献レビューを書く際のチェックリスト

1. レビューのトピックが明確に定義されているか。そのレビューでは何を扱うのか。新しいトピックのレビューか成熟した文献のレビューか。
2. 統合的文献レビューの必要性はあるか。なぜ経験的研究でも、メタ分析でもなく、統合的レビューなのか。統合的文献レビューは問題を解決するための最も適切な研究形態か。

3. 議論の範囲と境界が明確に定義されているか。何を扱い、何を扱わないかが明確か。
4. 文献レビューに対する著者の視点が読者に説明されているか (e.g. 中立的な立場 vs 特定の立場)。あるいは、そうした説明が必要なレビューであるか。
5. 読者のリーダービリティを高める書き方になっているか。イントロダクション部分で、レビューの動機が明確にされており、当該分野の価値が明示されているか。
6. 冒頭に近い部分で、重要な概念の定義が明確になされているか。
7. 当該レビュー論文によって、どのような貢献をしようとしているのかということが明示されているか。
8. 文献レビューの実施方法が十分に記述されているか。レビューする文献はどのように選定されたか。どのようなデータベースをどのように用いて文献を検索したか、など。
9. 紹介する具体的な先行研究の数が、レビューの目的と当該分野の研究蓄積の総量に対して妥当か。
10. 選択される先行研究の中に、自分の考え/主張と異なるもの、他の文献と異なる結果を示しているなど扱いにくいものも排除せずに含めているか。
11. 文献の検索・分析・解釈の方法が、読者にとって透明性のある記述になっているか。他の研究者がそのレビューを再現しようとした場合に、再現可能な程度に十分な情報が記載されているか。
12. 既存研究の中で蓄積された情報量を、適切に要約できているか。
13. 紹介する1つ1つの先行研究の記述のディテールのレベルが適切であるか。過剰にディテールを記述しすぎて全体像を見失ったり、必要な情報が含まれておらず読者がその領域の研究を理解しづらいものになっていないか。
14. 先行研究の紹介に際して、著者ではなく内容を中心とした記述となっているか。
15. 紹介する文献が効果的に整理されているか。
 - (a) アイデアの論理的な流れ、構成が整理されているか。
 - (b) そのレビュー論文の中で見直そうとしていることはなんなのか。そのトピックの主要な概念や理論はなんなのか。
 - (c) 図やその他の視覚的な表現を用いて文献レビューが構造化されており、読者の理解を深めるための工夫が行われているか。
16. 文献から得られた知識を自分なりに統合することで、そのトピックに対して付加価値を提供できているか。
17. その結論は、単に結論パートに記載されているにとどまらず、レビュー論文全体の内容と関連したものであるか。
18. 既存の文献を批判的に検討しているか。
19. その批判は、特定の研究者ではなく、研究内容に対して向けられたものになっているか。
20. そのトピックや分野の将来を提示しているか。そのトピックに関する更なる研究のための論点や研究課題を提供することで、将来の研究の基礎を築くことができているか。
21. 明確で簡潔で理解しやすい文章になっているか。
22. 論文の読者が明確になっているか。当該研究領域の人々以外の関心を喚起し、役立つ可能性があるか。

23. 「社員」「従業員」のように、同一用語に対して複数の言葉が明確な区別なく用いられていないか。
24. 「それでは〇〇の研究の紹介に移ろう」とか「〇〇の紹介が終わったので、次は××の紹介をしよう」といった風に、著者が読者のツアーガイドをするような「メタコメント」が極力カットされているか。
25. レビュー論文の著者の「意見」とレビュー対象となる文献の著者の「意見」と経験的証拠にもとづく「事実」とが区別されているか。